

韓国の「玉璽事件」

新井 宏

二年前の四月十六日に韓国でセウオル号沈没事件が発生した。

その時も、同時進行的に『史遊会通信』に「韓国セウオル号事件に思う」を書いて、「日本が謝罪しないから首脳会談は行わない」と「言いつけ外交」に精を出し、内政面では散々な実績の朴槿恵を批判した。

その頃は朴槿恵政権が誕生して一年余、『まんじ』にも「均衡者外交あるいはポーランドと韓国」を書き、慰安婦問題と南京事件、竹島と尖閣諸島問題で中国との共闘体制をつくり、日本に対する外交的な圧力をかける幼稚な政策を痛烈に批判した。

それから二年、野党の分裂下で行われた四月十三日の総選挙は、問題山積の朴槿恵の与党であっても過半数は問題なく達成するだろうというのが大方の予想であった。

しかし、朴槿恵はあまりにも「我が道」に固執していた。北朝鮮の挑発に対し、頼りにしていた中国からは冷たくされ、米国の圧力で不承不承、慰安婦問題で日韓合意に至ったものの、コミュニケーション能力に欠け、君臨して統治するスタイルは、与党内に親朴派

と反親朴派の対立をつくり、收拾不可能な状況になっていた。

朴槿恵は負ける、いや負けて欲しいというのが、選挙への私の関心事であり注視していた。それにしても与党よりもっと無責任な野党が勝つのはとても無理だとは思っていた。

しかし朴槿恵と親朴派は凶に乗り過ぎた。脱親朴派(反朴派)の立候補者に公認を与えなかったのである。その中に劉承政(リウソンジョン)がいた。

劉承政五十八才、もともとは朴槿恵を支えた新進の政治家であるが、今では朴槿恵を「法と原則、正義を破壊する民主主義者」と批判して、セヌリ党の院内代表にまで登り、将来の大統領候補とまで言われるようになっていく。この劉承政の「温かい保守」「正しい保守」の哲学は、野党「共に民主党」の金鍾仁や「国民の党」の安哲秀に通じるものがあり、国会運営には欠かせない人材であった。

これが朴槿恵を激怒させた。大統領の権限をフルに使い、院内代表の地位を剥奪し、ついには今回の総選挙で劉承政にセヌリ党の公認を与えなかった。そのため劉承政は無所属で立候補せざるをえなくなったのである。もともと朴槿恵にとっては、李明博大統領時代に親朴派が公認から締め出された時の報復のつもりだったのであろう。

これには韓国のマスコミも一斉に「政治史の恥」と攻撃したが、親朴派を擁立した朴槿恵は揺るがなかった。

ところがセヌリ党の代表は、朴槿恵ではなく金武星である。金武星は公認として決まっていた親朴派の候補に対し立候補の事務手続上必要な「代表職印」を持って釜山に逃げってしまったのである。

このマンガみたいな「玉璽事件」によって五選挙区でセヌリ党の公認候補がない状態が出現した。そして劉承政は復活に成功し、セヌリ党は大敗した。まるで、李氏朝鮮時代の権力闘争を見ているようである。

国会で少数派に転落した朴槿恵がレームダック化するのを避けられない。だからこそ同じように国会で少数派に転落しながら、野党を引き込み国政運営に成果を挙げた盧泰愚大統領を見習わなければならない。実は、盧泰愚は韓国で最も無能で人気のない大統領と見なされているが、私は一番評価している。

それにしても他人の国のことに何でそんなにムキになるのか、どこにだって不合理はある。ほうっておけばよいではないか。そうは思いながら、たまたま五月の連休明けに、講演のために韓国に行くこともあり「埋め草」のつもりでこれを書いた。